
J D F

辰巳尚喜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JDF

【Nコード】

N9149F

【作者名】

辰巳尚喜

【あらすじ】

始発帰りの朝、腹か血を流した外国人に鍵を渡されある人物に届けるように頼まれる。村田圭吾。平穏な日々から創造できない一日が始まる。鍵はいったい？果たして、村田圭吾の運命はいかに・・・

ラッキー or アンラッキー

寒さが少しは感じられる朝だった。日中は上着を着ていると暑いと感じるが、さすがに始発が走る頃は上着を着ていてよかったと村田圭吾は思っていた。

いつもの様に始発に乗って家路に向かっていった。

11月1日ともなればポケットに手をいれて前かがみに歩くようになっていた自分がやけに寂しい男の様に思えた。

村田はあくびをしながら明日からの三連休をどうするか考えていた。

早朝の町は人とすれ違う事もなく、ひっそり静まった建物が不気味に思える感覚が家路向かう足を速めていた。

いつもの様にフィットネスクラブの建物に差し掛かった時だった。

地面に点々と血の様な跡が現れた。

何だか気持ち悪いと思いながら、その跡の先に視線を向けた。

村田は元来、臆病だがその反面、好奇心は旺盛だった。

朝の5時半とはいえ、まだ辺りは暗闇に包まれているその中に点々と続く血の跡らしき赤い跡は恐怖感を超えた好奇心を生んでいた。

フィットネスクラブの地下駐車場へと向かうスロープの方にその跡は続いている。

村田は恐る恐るそつちに身体を向けた。

「うわぁ！」

思わず声を上げた。

村田の視線の先には人らしきものが座り込んでいた。
恐る恐る近付き声をかけてみた。

「大丈夫ですか？」

近寄ったその人らしきものはあきらかに人でそれも外国人の様だった。

50前後だろうか？スーツ姿で頭には少し白い物が混じっているように見えた。

「ううっ…」

脇腹辺りから血が流れている。

「救急車呼びましょうか」

外国人らしき男の容態はかなり悪いように見えた。

「これを…」

男はポケットから何かの鍵らしき物を村田に差し出した。

「えっ！どうしたら？」

あまりの事態に村田は混乱していた。

差し出された鍵を受け取ってしまったものの、どうしたらいいのかわからなかった。

「ケンザキ ハルカ」

外国人はそう言った

「ケンザキ？」

ぽつりぽつりと発する言葉に聞き耳をたてた。

「ワタシのナマエはジェフ ドーソン」

村田は発する言葉を反復しながら聞いていた。

「ソノ キーノナカノモノヲ…」

「中の物をケンザキと言う人に届けたいんですか？」

そのジェフドーソンと名乗る男は村田に何かを託すように話しをつづけた。

「トウキョー…ヤツラヨリマエニ」

混乱を深めていた。

ジグソーパズルのピースを合わせるかのように、ジェフドーソンの言葉をつなげていた。

「とりあえず救急車呼びますね。」

携帯を取り出した村田を制した手には予想外の力があつた。

「タノム、ブジニトケテ クレ」

ジェフドーソンの目力に村田は頷く事しか許されない感覚に襲われた。

「キミハ？」

「村田、村田圭吾です」

ジェフドーソンは何かを差し出した。

「コノデアイはラッキーオアアンラッキーカハキミシダイダ」

差し出されたのは財布だった。

「ハヤク！ヤツラニミツカルマエニ イクンダ」

鋭い目力に何も言えず、村田はその場から立ち去るしかなかった。

何も考えず全力で走った。

家まで700mあまり、無我夢中だった。

誰かに着けられてないか確認して家に入った。

さっきまで寒いと縮こまっていた身体から湯気が出るほどで、息はあがり、鼓動はマックスだった。

運動不足の28歳には当然の状態だった。

部屋に入りベットに腰をかけタバコに火を点けようとしたが、驚くほど手が震えていた。

緊張をほぐすためのタバコがそれを余計に確認する結果になった。

遠くで聞こえるサイレンの音がさっきのあの外国人を思いださせる。

誰かが連絡して救急車が来たのか、それともパトカーが来たのか。

サイレンの音に敏感になる自分が嫌になり、ベットに入り布団を頭からかぶった。

夢Or現実

2

9時10分

目が覚めた。まるで悪夢を見た後の様に疲れた感覚だった。

いや、悪夢であって欲しいと願った。

だがそれははかない願いだった。

テーブルの上には鍵と財布

ジェフドールソンと言う外国人から預かった物

村田は頭を整理していた。

ケンザキハルカと言う人に届ける

ヤツラより先に！

鍵。コインロッカーの鍵のようだった。

NO111

一体何処のコインロッカーなんだ？

村田は財布の中を調べた。

中身は一万円札が8枚と千円札が4枚に米ドルが少しあった。

その他には何も無かった。

NO111 それだけの数のコインロッカーがあるとすれば三宮か新神戸だろう。

村田は意を決して鍵を手にとった。

家から駅までの道のり、今朝全力で走った道のりだ。

村田は歩を進めるたびに心臓の鼓動が早くなるのを感じていた。

もうすぐ、ジェフドーソンが倒れていたフィットネスクラブだ。

事件になっていれば何だかの痕跡があるはずだ。

村田はあえて反対の歩道を歩いた。

フィットネスクラブは何も無かったかの様に営業していた。今朝の場所、地下駐車場へのスロープには普通に車が吸い込まれていく。混乱していた。ジェフドーソンはいつたいどうした。

あの状態では自力で動く事は出来なかったはず。

ヤツラと言った者が連れ去ったか、仲間が助けにきたか？

いずれにせよ、今朝の痕跡は何も無かった。

あれだけあった血の跡も皆無だった。

村田の混乱は加速していた。

臆病より好奇心が勝った。

鍵を開け中身を見たい。

村田は三宮へ向かうため阪急六甲の駅へと急いだ。

連休初日の三宮は混んでいた。村田は思い付くコインロッカーの場所に足を向けた。

『NO111』があり、尚且つ使用中のコインロッカー

一カ所目は空振り、NOは55までしかなかった。

二カ所目、三ヶ所目と鍵は合わなかった。

思い付く場所を回ったが該当するコインロッカーはなかった。

三宮を諦め新神戸に移動しようと地下鉄に足を向けた。

時折、「ヤツラ」と言う言葉が気になり、周りを気にしたりしたが、何者かもわからないのにその行為は村田を挙動不審にするだけだった。

地下鉄に向かう階段を下りた時にコインロッカーを見つけた。

明らかに数は少なくむだ足になるとは思いながら『NO111』をさがした。

「あつた！」

ほんの20個ほどのコインロッカーだったのにその中に探していたNOがあつた。

村田は例の鍵を出し、コインロッカーの鍵穴に差し込み回した。

カチャ！

「開いた！」

奇跡のようだった。村田は恐る恐る扉を開けた。

中には、セカンドバックが入っていた。

辺りを気にしつつ、バックを取り出しその場から離れた。

臆病 or 好奇心

村田は興奮気味だった。

バックの中を早く見たかった。

一人でこっそり見れる場所を探していた。

ヒトゴミを掻き分けて、村田はインターネットカフェにはいった。

整然と並ぶ個室の一つに入るとはやる気持ちを抑え切れず、バックのチャックに手を伸ばした。

二カ所あるチャックの一つをゆっくり開けた。

中には茶封筒が入っていた。

村田の手は微かに震えていた。

まず目に入ったのは、帯封がされた札束が2つ！

思わず生唾を飲んだ。

次にUSBが一つ、写真が一枚

写真は30前後の女性だった。

そして反対側のチャックを開ける。

一瞬大きな声がでそうになったのを村田は堪えた。

「マジかよ」

バックの中には無造作に入れられた黒く光る拳銃があった。

その銃が何て種類かは村田には解らなかったがオートマチックであることと以外に小ぶりだと思いながら、眺めていた。

とっさの判断で触ってはいけないと感じて何も見なかったかの様にチャックを閉めた。

村田は思い返して、札束とUSBと写真を眺めた。

写真の女性はおそらく『ケンザキハルカ』

そしてUSBが届けるべき物

じゃあ札束は何だ？着手金かジェフドーソン個人の金が、それともこの金も届け物か？

混乱、恐怖、好奇心が入り交じっていた。

村田はパソコンに向かい『ケンザキハルカ』を検索キーワードの欄に打ち込んだ。

以外にヒット数は多かった。

上から順に開けていく。

何処かの大学の名簿やら懸賞の当選やらと次々に出て来る。

何件目かを開けた時だった。

「これや」

村田は思わず声をあげた。

画面に写し出されたのは、最近有名な空間デザイナーのホームページ

その中に検崎春香の名前と写真があった。

今話題の空間デザイナー 検崎順平の妻であり、会社の社長でもある、
いわゆる勝ち組だ！

事務所は代官山、自宅も代官山にあるようで、自らの自宅や事務所の
デザインを誇らしげに載せていた。

村田はそのページをプリントアウトした。

どうしてそう思つかは解らなかったが、検崎春香にUSBを届けよう
と思った。

期待 or 不安

連休の新幹線は混んでいた。指定席は埋まっていたが自由席で東京に行く気にもなれずいた。

ジェフドーソンの財布、あれには90万ちかい金が入っていた。

村田は鍵と一緒に渡された物だから使えと言う事だろうと思い、そこからの金でグリーン席のチケットを買った。

時間は昼の1時を回ったところだった。

新幹線が発車すると、村田はさっきのプリントアウトした資料を読み返していた。

検崎春香 32歳 双子座フェイリス女子大卒業 卒業後は大手広告代理店に就職、28歳で検崎公平と結婚 その後ケンデザインの社長になった。

何とも順風満帆な人生だと村田は鼻で笑った。

自分は高卒で、今は小さなバーの雇われ店長

天と地ほどの差がある。

村田は資料を置き、ジェフドーソンの財布をもう一度調べた。

中はやはり金しか入ってなかった。

さすがにバックを見るのはやめた。

中に銃が入っている事に気がついたからだった。
村田は大きいため息をついて目を閉じた。

ジェフドーソンが言った、「ラッキーかアンラッキーかは君しだいだ」

何度も頭の中で回っていた。

東京駅はこった返していた。うんざりするほどの人に村田は戦意喪失気味だった。

気を取り直しケンデザインに電話を入れようと思っていた。

三連休で居ない可能性は高かったが、そこ以外の連絡先はわからない。

最悪は自宅を探し出して訪ねるしかないと思っていた。

電話のコールは3回目だった。

「はい、ケンデザインです。」

女性の声だった。

「すみません、検崎春香さんをお願いします」

「失礼ですが？」

「ジェフドーソンの代理の者です」

村田は迷いなくジェフドーソンの名前をだした。

「JD！会社にかけてくるなんてどういう事！」

どうやらこの女性が検崎春香のようだった。写真のイメージと違い、少し声が低いと思っていた。

「いや、私はジェフドーソンではありません。村田と言う者です」

「どういう事？」

村田は今までのいきさつを話した。

「なるほど、あなたは今何処にいるの？」

「東京駅です。」

検崎春香は品川のホテルで待ち合わせようといって、お互いの携帯番号を教えた。

「USBは？」

「あります。」

村田はカネの事は聞かないのかと思い、同時にラッキーかもと思った。

電話を切ると人込みを書き分け、山手線のホームに向かった。

この人込みでは例えつけられていてもわからないと思いながら、周

りの人達をインプットしていた。

仕事柄、人の顔を覚えるのは得意だった。

村田が今のお店を任されるようになったのも、記憶力のよさでお客様の顔と名前と好みを瞬時に覚える事が要因になった。

怪しい奴。そう思えばみんなそう見えるし、そうでないと思えばみんなそうだ。

品川駅につくと大量の人と一緒に押し出された。

目的のホテルは駅からすぐ、検崎春香かが代官山からくるにはまだ少し時間がある。

急に反転した。もし、誰かがつけていればおかしい動きになるはずだ。

周りに注意をはらいなが歩いた。

村田が思っほどわからずに、また反転してホテルを目指した。

女 or 男

ホテルを前に村田は色々チェックした。

何処に何があるか、特に出入り口が何箇所あり、それが何処に繋がっているのか。

ホテルに入るとやはり人が多く感じられた。

待ち合わせのティーラウンジはすぐに確認できた。

村田はあえてロビーカウンターでさっき確認したホテル内にある鉄板焼きの店の場所を聞いた。

ここに居る事を怪しまれない為に考えた事だった。

村田は携帯を取り出し、かけるふりをしようとした時に電話が鳴った。

「もしもし」

「JD、もうホテルに着いてる？」

「今、ロビーにいます」

「私もラウンジにいるけど、事態が変わったわ。どうやら着けられてみたい？」

村田は生唾を飲んだ。やはり危険があると感じた。

「私の事が確認出来る？」

ラウンジに視線を向けた。

オープンになったティールラウンジの入口付近に写真で見た検崎春香が濃紺のスーツでいた。

「確認しました。入口から二つ目のテーブルですね。」

「そお、あなたは？」

「ロビーカウンターの前です。ジーンズに黒ぽいジャケットです。」

「私も確認できたわ、以外に男前ね」

今の状況では礼を言う気にもなれなかった。

「私の斜め向かいのテーブルに男が二人居るのがわかる。黒のストライプのスーツと濃紺のスーツ」

村田はチラ見して確認した。ストライプは細身の男前、濃紺は四角い顔の柔道体型

「その二人に間違いないんですか？」

「間違いはないと思うわ」

検崎春香は地下の駐車場に向かうからそのエレベーターで渡す用に言った。

村田は了解し、一旦手洗水に足を向けた。

行くor戻る

村田が手洗水から出て来ると検崎春香はレジで精算をしていた。

エレベーターに向かいながら持参したクロブチの眼鏡を掛けた。

村田は眼鏡マニアでかならず二、三個の眼鏡をもっていた。

エレベーターの前に立ち、階下へのボタンを押した。

そのすぐ後ろに検崎春香が来たのを確認したと同時に磨かれたエレベーターの扉にストライプの男前が写った。

一瞬ひやりとした時にエレベーターの扉が開いた。

村田が初めに乗り込み、B2のボタンを押して1番奥に行った。

その後に検崎春香が左前に入り、最後にストライプが右前に陣取った。

1階から地下2階までの間色々考えていた。

村田の心拍数は跳ね上がり、周りの二人に音が聞こえのでは無いかと心配していた。

地下2階に着く寸前に村田の携帯が鳴った。

心臓が止まるくらい驚いたが、何も無かった用に電話に出た。

「もしもし」

相手はお店の常連客だった。

村田はこれを幸いに普通に会話した。

エレベーターの扉は開き、検崎春香が先に出た。ストライプが村田に先に出る用に進め、開のボタンを押していた。

軽く会釈して先に出るとエレベーター横にあった灰皿の所に向かった。

検崎春香は真つすぐ車に向かって行く。

村田はたわいもない会話を続けていた。

「今、品川にいますよ。あつ、すいません」

ストライプは検崎春香の後方をゆっくり歩いている。

「わかりました。正面口ですね。今から行きます。今、地下の駐車場にいますから」

村田の機転だった。電話はとくに切れていた。

検崎春香が今の会話に反応して出て来るのにかけるしかなかった。

さつき色々確認した時に地下駐車場の出口が正面口のすぐ横にあるのを知っていた。

車は赤のBMWだった。

エレベーターの階上のボタンを押した。

後ろで車のドアの閉まる音が2つした。

1つは検崎春香のBM、もう1つはストライプの車の物

エレベーターが着いて扉が開いた瞬間、中から柔道体型が出てきた。

村田は何もないかのごとく入れ代わりにエレベーターの中へ

その瞬間BMのエンジンがかかる音がした。

その近くにあったマークXにストライプの姿がみえた。

エレベーターで一階に上がり正面口を出て駐車場の出口に向かう。

時間的には村田の方が少し早いと思っていた。

エレベーターの扉が上がり開いた瞬間に飛び出し、正面口へと急いだ。

正面口を出た時、一瞬ひやりとした空気が身体を包んだ。

正面口付近は混み合っていた。時間は夕方5時前

車の出入りも多くなっている。

村田はクロブチ眼鏡から茶色いレンズのサングラスに架け替えた。

駐車場の出口付近に着いた時、地下から車の出て来る音がした。

程なく赤いBMWが見えた。

検崎春香も村田を確認したようだった。

BMWが出てきた瞬間に村田は後部座席に雪崩こんだ。

安堵 or 不安

「機転がきくのね。」

検崎春香がバックミラー越しにいった。

「ラッキーが重なっただけだよ」

村田は後部座席で身体を低くしたまま答えた。

「ところで、USBは？」

村田はポケットから取り出し、アームレストに置いた。

「今、何処へ向かってる？」

「とりあえず渋谷方面にむかってるわ」

「何でもいいからドライブスルー見つけたら入ってくれ、そこで降りる」

「なるほどね、さすがJD」

「俺はJDじゃない！村田だよ」

ハイハイとばかりに検崎春香は笑っていた。

「右手にドライブスルー見つけたわ」

そう言つと車を向けた。

夕方の幹線道路は混んでいた。

「奴らの車は？」

「通り過ぎたわ。」

車はゆっくりドライブスルーの建物の中に入った。

「じゃあ、これで！」

「中身の確認が出来たら連絡します。」

「お好きに、今晚は都内にいますから。」

赤いBMWは何も注文しないまま走り出した。

村田は店内に向かい、朝から何も食べていない胃袋を満たすためにハンバーガーを注文した。

ジェフ・ドーンソンなる外国人に会ってからまだ、12時間ほどだが、驚くほど激動な一日だったと思い返していた。

三宮のロッカーで見つけた物は東京駅に着いた時に同じ様にロッカーに預けた。

これで終わり、そう思っていた。

何とかホテルの予約が取れた。場所は新橋。

小さなビジネスホテルだった。

村田は部屋に入るとそのままベットに大の字に倒れ込んだ。

朝からの色々は肉体と精神の両方を疲れさせた。

すぐに意識を失い眠りに入った。

村田は夢を見ていた。

今日の出来事を復習するかの如く、ジェフドーソン、USB、
検崎春香、ストライプのハンサム、柔道体型など次々に現れた。

何故だか行動的だったし、かなりうまく立ち回れた。

夢の中に死んだ父親がでてきた。

5年前、海外出張中に飛行機事故で死んでいた。

「圭吾、お前ならやれるよ。俺の息子だからな」

村田は夢は携帯の呼出し音で終わった。

「もしもし」

「もしもし」D、いや村田さん？」

検崎春香だった。何だか焦っている。

「奴らが事務所にやってきてUSBを奪っていったの」
「それで？」

「それでって！あなた、あれがないと困るのよ！」

村田は冷静だった。届けてしまえば自分の役目は終わりだと思っているのと理由はもう一つあった。

「私は届けて確認されれば仕事は終わりです。」

「そ、それはそうだけど……」

検崎春香は言葉に詰まっていた。

「今事務所ですか？」

「そうだけど」

「1時間後に伺います」

「どういつ事？」

「USB要るんでしょ」

「有るの？」

困惑する検崎春香を無視して電話をきった。

ジャケットを羽織り、村田はホテルの部屋を飛び出した。

嘘 or 真実

電話からちょうど1時間後だった。

ケンデザインの前に村田はいた。

検崎春香からの電話の後、東京駅に行き、二度と手にしない予定だったセカンドバックを手にした。

時間は夜の10時を回っていた。

タクシーの窓からは連休を楽しむ人達が見えていた。

代官山の人通りが切れた頃斬新なデザインの五階建てのビルが見えた。

ケンデザインの扉は開いていた。

村田は細心の注意を払いながら中に入った。

「時間ピッタリね」

奥のデスクから検崎春香が声をかけてきた。

「お届け物ですよ」

「ご苦労様」

男の声と共に例の二人組が姿を表した。

村田は検崎春香を睨んだ

「渡して貰おうか！」

ストライプが村田に銃を向けて言った。

「物騒ですね、USBはその人から奪ったんでしょう」

村田は強気の発言をした。

「なかなかいい度胸だ小僧！あのUSBにはコピーされたあとがあるんだよ！お前もってるだろ」

ストライプは声をあげた。

村田は少し驚いた顔をした。それは声をあげられた事ではなく、コピーした事がばれた事にだった。

「ありますよ。ここに！」

村田はセカンドバックを叩いて見せた。

「早く渡せ！」

わかったとばかりに村田はセカンドバックのチャックに手をかけた。

そこからの行動は

村田自身も驚くほど素早かった。

セカンドバックから右手で銃を取りだしストライプに向け、左手でモバイルPCを出した。

「おっと、動かないくださいね。このPCは今ネットに繋がって

ます。それもファイル共有ソフトってやつにね」

村田は左手のPCの画面を見せた。それにはUSBもしっかり刺さっていた。

「小僧、ダメエ！」

柔道体型がいきり立った。

「やめる！」

ストライプが制しする

「悪いけど、二人がここから出ていくか、俺とその人が出ていくかなんだけど」

ストライプの舌打ちが聞こえた。

ここまで大胆な事をしたわりには、この後は村田自身ノープランだった。

「どうします？EnterKey一発で情報は流れますよ」

ストライプは顔色一つ変えない。

村田の身体は汗でびっしょりだった。

大胆な発言と行動のわりに緊張はかなりのものだった。

「わかったよ、この女と交換だ。」

ストライプが柔道体型に指示を出す。

銃突き付けられたまま、検崎春香が村田に向かってゆっくり歩いてくる。

自然と村田の銃を持つ指にも力が入った。

ストライプの視線、柔道体型の動き、意識を集中させていた。

検崎春香が目の前まで来た。柔道体型の荒い鼻息が聞こえる。

心臓の鼓動はマックスだった。

どう出て来る？そしてどうする？

村田は考えていた。

「そこまでだ！」

村田は驚きを隠せなかった。

声とともに現れたのは、今朝腹から血を流して座り込んでいたジェフ・ドーンソンと名乗った男だった。

「何であんたが…」

一気に周り奴らの緊張がほぐれた感じがした。

「圭吾、合格だよ」

村田は意味がわからず呆然としていた。

「とりあえず、物騒な物を下ろせ、とは言っても撃った所で空砲だ
がね」

「どう言う事だ！」

ジェフドーソンはゆっくりと村田に近付き話し始めた。

「改めて自己紹介しよう。私はガイヤバロック

彼等是我々のメンバーだ」

「メンバー？」

「我々はジェフドーソンズファミリーと言う組織の一員だ！」

話しながらガイヤバロックと名乗った男は一枚の写真を見せた。

その写真にはここに居る村田以外全員が写っていた。

「親父！」

村田は思わず声をあげた！写真にはみんなの真ん中で笑う村田大悟、
村田の死んだ父親が写っていた。

「何で親父が！」

村田はガイヤバロックに詰め寄った。

「我々JDSは世界規模の秘密組織だ。重要な情報を運ぶ運び屋と
言った所だ」

村田は写真を眺め続けていた。

「私はガイヤバロックコードネームは、G、極東のリーダーだ。そして検崎春香、H、そして彼が須藤正二、S、もう一人が田所栄治、E、だ」

ストライプが、S、で柔道体型が、E、だと言われた。

「そして君の父親、村田大悟、D、は我々の仲間だった。5年前の不慮の事故でなくなるまでは」

村田はガイヤバロックの発する言葉がまるで小説でも読んでいるかの様に聞こえていた。

「圭吾、我々はずっと君を見守っていた。D、の死後忘れ形見を大事にな」

彼等の意図を探っていた。

何が目的なのか？どうしてこんな事をしたのか？

「我々は新しいメンバーを捜していた。そしてやはり君が1番の候補になった。D、の遺伝子を受け継ぐ、K、にな」

「どうして俺なんだ。」

村田は噛み付いた。

「お前、D、いや父親に知らず知らずに教育されていたんだよ。」
まったく意味がわからない感じだった。知らず知らずに教育されて

いたと言われても何とも言えない感じだった。

村田の混乱は続いていた。

過去 or 未来

「どう？私と一緒にやらない？あなたは才能あるわよ」

Hが笑顔で言う。

「心配なくていいぞ」

入り口に突然現われたのは剣崎順平だった。

「あなたもメンバーなんですか？」

「そうだ、Dの亡き後は私がメンバーを束ねている」

空間デザイナーと言うのは隠れ蓑だった。

剣崎順平と剣崎春香は世間的には誰もうらやむ夫婦

しかし、その実態はJDFのメンバーで二人は夫婦ではなかった。

村田の驚きは続いていた。

「一緒にやるぜ！」

Eが肩を両手で掴んで力強く言う。

「違う人生も悪くないぜ」

Sがニヒルに笑いながら言った。

「圭吾、私たちとやってみないか？危険はあるがスリリングな人生になるぞ！」

Gが鋭い眼光で言う

村田は悩んでいた。臆病と好奇心の間でゆれていた。

「本当に俺で大丈夫なのか？」

全員が笑顔で頷いた。

今の自分を考えていた。毎日夕方から朝までバーテンダーとして働く、それはそれで楽しくもあつたが、何だか満たされない日々だった。

今日一日はスリリングだった。こんなに頭を使った事はこの所なかった。

何か違う自分になりたかった。

「わかった、やろう」

全員が安堵の表情になり村田に駆け寄った。

「今日からお前は『K』だ頼んだぞ」

村田圭吾の人生が変わった瞬間だった。

知らず知らずに父親に催眠学習されていたようだった。

身についたJDFのメンバーとしての対処方法

圭吾の父、大吾はJDFのメンバーのリーダーとして長くやってきていた。

その忘れ形見の圭吾には、生まれながらの運命があった。

そして彼がこれから世界の重要な情報を運ぶことになる。

JDF、常に情報は巡っている。

荷物 野心

村田圭吾はカウンターに座り新聞を広げていた。

あのジェフドーソンとの出会いから7ヶ月が経った。

あの後、JDSのメンバーになり特別な訓練を受けた後、新神戸近くに小さなバーを開店した。

もちろんJDSの資金でだ。

何故、新神戸なのか？理由は簡単！新幹線にすぐに飛び乗れる様だ。

実際、バーの営業は隠れみに過ぎなかった。

場所がら、さほど忙しくなく、道楽でやっていると思われていた。

時折休むのも趣味の写真を撮りに行っている事になっている。

「まいど、宅配便です。」

「ご苦勞様」

村田はいつものように伝票にサインをした。

小さな箱を受け取るとすぐに空けた。

中にはクリスタルのロックグラスが一個とSDカードが一枚。

いつもの様に携帯にカードを差し込み情報呼び出した。

「おはよう、K。またお仕事です。」

‘H’事、検崎春香の画像が流れ、今回の仕事の内容が話された。

仕事の依頼はいつもこんな感じだ。

今回の贈り主は在阪の与党衆議院議員の大物塩田義信の第一秘書和山武

受取人は同じく衆議院の尾山三郎の第一秘書山根章

尾山は野党の大物。

荷物はSDカード

中身は安易に想像がつく。

世に出ては困る塩田の情報。秘書が敵陣に売った。

「和山には探偵が張り付いているから慎重によろしく。じゃ、東京で」

村田は近畿圏と中国、四国の一部の担当。

受け渡しも巧妙に練られている。

全てを確認して携帯を閉じた。

荷物 野心2

6月10日贈り主から荷物を受け取る日

場所は新大阪駅構内にある本屋。

受け取る方法はその店の本にSDカードを挟んで入れる。

本のタイトルは「腐敗政治」まさにうつつつけだ。

11時ジャストに村田は駅構内の喫煙場所にいた。

そこから本屋に入る人は確認できた。

スーツ姿の人がさすがに多く、慎重に行き交う人を見ていた。

その村田自身もスーツに身を包んでいた。

程なくデータで確認した写真の和山武が現れた。

政治家の秘書らしく、きつちりとした身なりをしていた。

和山は目的の本屋に入って行く。

村田もゆっくりと歩きだした。

多くの人が行き交う中、明らかに和山を意識している男を見つけた。

一見、普通のサラリーマンに見える30代

明らかに和山を見張っている。

こいつがHが言っていた探偵かと思ひ注意を払った。

村田は和山が確認できる場所で雑誌に手を伸ばし、周りに気を配った。

和山との距離は数メートル、例の探偵は外から和山の様子を伺っている。

「腐敗政治」を手に取り読んでいる和山。

SDカードを挟むタイミングを狙っているのだろう。

村田は探偵から和山が死角になる位置に立った。

次の瞬間、和山は本を閉じ、本棚に戻した。

村田は場所を移動して、和山の動きをおった。

雑誌を一冊手に取るとレジで精算を済ませ出て行った。

それを見届けてから、SDのピックアップしに移動した。

村田は他の本と「腐敗政治」を手に取りSDを抜き取った。

荷物 野心3

新幹線の出発まで、村田は喫茶店に入る事にした。

ガラス張りのカウンターに座り、コーヒーを注文した。
受け取ったSDをいつもの様に端末機でコピーした。

改札の前に和山が見える。腕時計を見ながら出発を確認している様子だった。

その近くに探偵もいた。

村田は探偵の写真を隠し撮りした。

「荷物は受け取った。今から目的地にむかう。異物確認願う」

村田はHにメールを送った。さっきの写真を添えて。
程なく返信がきた。

「ご苦労様です。先方には連絡済みです。お尋ねの件は以下です。」

Hの早い対応だった。

探偵は中村俊哉31歳、廣田興信所の人間

廣田興信所はかなり有名な興信所だった。テレビなどでもちよくちよく見る事があった。

和山が改札に入っていた。後を追う様に中村も改札に向かった。

村田は慌てる必要もなく、ゆっくりしていた。

荷物を受け取った時点でそれ以外は関係ない所だった。
あとは無事受取人に渡せれば問題はなかった。

新幹線に乗り込むと村田はいつも席に着いた。

チケットは決まってグリーン車進行方向に向かつ左側最後列の2席だった。

必ず一人でも2席だった。

村田は通路側に腰を下ろし、車内を確認した。

和山は進行方向左側一番前、中村はその5列後方右側
村田は特に気にする事なく、さっき買った「腐敗政治」を読み始めた。

今の政治と政治家のダメっぷりを延々と書いていた。
いくらほざいても変わらない事柄ばかりだった。

村田は読むのに飽き、車内販売の弁当を買った。

塩田義信は人民党の重鎮、次の総理候補だ。

一方の尾山三郎は民各党の代表。

政権が交代すればこちらも総理候補

暗躍する足の引っ張り合い。

村田は無事に荷物が運べればいいと思っていた。

新幹線の間はこれと言って何もなかった。

和山が何度か携帯で話しにグリーン車から出ただけだった。

村田は品川で下りるつもりで準備を始めた。

車内が幾分慌ただしい空気になり、新幹線は品川に到達した。

和山も中村も動かない。奴らは東京までだろう。

品川で降りると村田はタクシー乗り場に向かった。

政治家1

代官山に来るのは一月ぶりだった。

ケンデザインはJDFの隠れアジト

村田は何食わぬ顔で事務所に入った。

怪しまれる心配は無かった。村田の神戸のバー「Runner」はケンデザインが手掛けた作品。

何事にも抜かりはない。村田の父、村田大悟からの繋がりもある。

「お疲れ様です」

事務所に入るとスタッフが声をかけてきた。

ケンデザインには女性2名男性2名のスタッフがいる。

彼らは全員JDFのメンバー。表向きはケンデザインのスタッフ

しかしながら、実はJDFのサポートメンバー

村田達コードネームのある人間はS級Runner

コードネームの無い人間はサブだった。

「受け渡し方法は」

村田は挨拶もおざなりに、奥のデスクのHにいった。

「今晚、赤坂の料亭 水谷で受け渡しよ。」

Hはパソコンのモニターから目を離さずに言った

「俺と一緒に水谷に行く」

奥からJこと、検崎順平が現れた。

受け渡しは料亭、水谷にJと行き、尾山達こ一行が到着したら渡す。

9時30分に手洗いで。

「尾山達はそこで中身を確認して日が変わるまでにマスコミにリークする。明日朝は大騒ぎって訳ね。料亭内で全て終了。誰にも気付かれずにね」

料亭 水谷は政財界の御用達密会場所

超高級な店だ。

二年前にケンデザインはこの改装を手掛けている。
だから高級料亭に安易に出入りができる。

「我々の予約は8時、奴らは9時。ゆっくり料理が楽しめる」

Jが笑顔で言った。検崎順平、Hの旦那に表向きはなっているが、これもJDFの隠れみの。

二人はあかの他人だった。

「サポートはナツとキヨウがつくわ。」

ナツ、Hの実の妹吉原夏美

キョウは河井恭平、二人とも20代半ばのサポートメンバー

「時間まで写真でも撮ってくるわ、なんせ趣味の写真を撮る為に店休んでるからな」

そう言って村田は出口に向かった。

バーのマスターで趣味は写真。月に何度か店を休んで写真を撮りに行く。表向きは。

政治家2

8時5分前に料亭 水谷に着いた。

赤坂の街中にでんと構える重厚な門

Hが運転のBMは車寄せで止まった。

「いらつしゃいませ、ようこそお越しくださいました。 検崎先生」

すぐに中から高そうな着物に身を覆った女将が番頭と仲居を従えて現れた。

「女将さんお世話になります。」

Jは爽やかに笑顔で挨拶をした。

日本庭園がよく手入れされている、

長くよく磨かれた廊下を案内されながら、村田は場所の確認をしていた。

村田達の通された部屋は奥から三つ目の鞍馬の間

尾山たちは一番奥の金閣の間だった。

Jと女将が世間話をしながら、酒の注文をしている間村田は庭を見ていた。

感動すら覚える庭を眺めながら色々な確認はおこたらなかった。

「では、すぐにお持ちしますね。」

女将はそう言つと部屋をでた。

「いい庭だろう。」

Ｊが自慢げに言った。

ＪＤＦの幹部でありながら、デザイナーとしての才能は本物だった。

「Ｊはこっち一本の方がいいんじゃないの？」

ニヤリッと笑つと村田に座る様を示した。

政治家3

運ばれてくる料理を食べながら、尾山達が来るのを待った。

その間二人はあくまで、店舗デザインの打ち合わせをしている振りをしていた。

Hからメールが入った。予定の時間の少し前

その直後、廊下を歩く足音が聞こえた。

順番に足音が聞こえ10人くらいの人が金閣の間へと消えていった。

「K、そろそろ準備だな」

Jの言葉に頷き、SDカードを確認した。

受け渡しはトイレ

Kが先に行き、ペーパーホルダーの中に隠す。

それを山根が受け取る手筈になっている。

時計を見ながらその時間を待っていた。

「では、トイレに行ってくる」

村田が席を立ち、庄子に手をかけた瞬間、Jの携帯と村田の携帯ともにメールが入った。

「K！ストップだ！」

Hからの緊急メール。

予想外の人物が現れた。

塩田だった。

すぐにドタドタと足音が聞こえた。

Jが盗聴機のスイッチを入れる。

「キサマら何をたくらんどる！」

部屋に入るなり塩田が声をあげた。

「いったい何ですか塩田先生」

尾山が冷静に返す。

押し問答は続いた。塩田は尾山達の画策に気付いているようだが、まだ、その真意にはたどり着けてはいないようだった。

時間が過ぎていく、村田達も何時までもここに留まる訳にはいかなかった。

山根も今の状態では身動きが取れないだろう。

村田達は一旦店を出てからプランを変更することにした。

リミットまではまだ少しある。

政治家4

「ごちそうさまでした。また伺います。」

「Jが女将と挨拶をしている。」

村田はHの運転する車に乗りこんだ。

「どうする？」

「塩田の登場は予想外だったわね」

「Jが乗り込み車は発進した。」

「とりあえず車を変えるわね。」

「ナツは何処にいる？」

「予定通り向かいのドーナツ屋にいるわ」

近くの地下駐車場にキヨウがマークXで待っていた。

「少し様子を見よう。最悪、俺はもう一度戻るから」

「Jは戻りやすいのは確かだが、危険も大きいと村田は思った。」

「俺とキヨウは近くで待つ」

村田はそう言うとマークXに乗り込んだ。

「回線はオープンにしておいて」

タイムリミットは12時だった。

尾山達は情報を確認し、その場でマスコミにリークする。

料亭と言う密室で全てが終わる。

「かなり塩田は怒鳴ってますね」

キョウが、盗聴を聞きながら言った。

水谷には巧妙に盗聴機が仕掛けられている。

村田のマークXは水谷が見える路上で待機していた。
ナツからの無線が入った。

「水谷の正面右側に廣田興信所の車が二台いるわね。レクサスとオデッセイ」

二台はすぐに確認できた。

用心しなければいけない。奴らに気付かれるのはまずい。

とりあえず塩田が帰らなければ動きがとれない。

中には塩田達、表には探偵
下手に動く事は命とりだ。

「K、俺がもう一度戻る」

「Jがいらついたように言う。」

「塩田が出ない事には戻ってもしかたかないだろう。それにJが行

くのは危険だ」

村田には考えがあつた。

政治家5

一時間ほどして塩田が出てきた。散々怒鳴り散らしたが、尾山に軽くあしらわれたようだった。

黒塗りのベンツが水谷から出て来た。

同時に探偵のレクサスも動き出す。

オデッセイは見張りの様だった。

「キョウ、バルーンは有か？」

「なるほど、準備します」

キョウは村田の意図をわかったようだった。

バルーンとはまさしき風船の事だった。

風船に荷物を付ける。小さい物なら何の問題もない。

風船と言っても、ただの風船ではない、遠隔操作が出来る様になっている。

JDFは秘密組織

小道具も色々だ。

「今からナツと合流する」

村田はそう言つと車を降りた。

ナツの居るドーナツ屋は路面に面したガラス張り、その窓際のカウンターにパソコンを広げて座っている。

水谷の真正面、オデッセイは何かを待つように息を潜めて止まっている。

「準備はOKよ、キョウが指示を待ってるわ」

どう見ても女子大生の暇潰ししか見えないナツの隣に座った。

パソコンの画面にはカモフラージュ用のポータルサイトが写っていた。

「K、山根には連絡ついたわ、庭に出て貰うように言ったわ。頼むわね」

Hからの連絡を聞いて、ナツに合図をした。

村田は携帯をバルーンの操作用に切り替えた。

「バルーン確認、左から黄色奴」

ナツの言葉と同時に村田の携帯にバルーンからの映像が写し出された。

「今はほとんど風は無いわ、チャンスね」

ゆっくりと風船は水谷に近付く、あたかも誰かが離れた物がゆらゆら漂っているかの様に

慎重にバルーンを操作する。

オデッセイの奴らは全く気にしていないようだった。

黄色の風船から伸びる紐の先にはSDカードがついている。

村田の操作で水谷の庭にゆっくり降下していく。

携帯の画面には風船に取付られた小型カメラの映像が写し出される。

さっきまで眺めていた庭が写しだされる。

庭木に当たらない様に慎重に操作する。

スーツ姿の山根が写った。

辺りを気にしながらSDカードに手を伸ばす。

山根の手に荷物は渡った。

「配達完了!」

遠隔操作で風船は割れた。

村田は携帯の画面を元にもどし、ナツはパソコンを閉じた。

「お疲れ様、撤収よろしく」

Hからの連絡で村田とナツは席を立った。

翌日の朝刊に人民党、塩田議員の今までの悪行が紙面を賑わせていた。

政権交代は必至、尾山は時期総理になるのは確実だろう。

その影にJDFがいる事は世間は知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9149f/>

JDF

2010年11月22日21時52分発行